

受付番号

留学・研究計画書

|  |                         |
|--|-------------------------|
| 氏名 佐治 史  | 留学機関名<br>チュラロンコーン大学     |
| 留学先国名 タイ   | 留学期間 西暦 2010年8月～2012年7月 |
| 研究テーマ<br>タイ都市近郊における観光化と地域社会の変容<br>ー タイ ダムヌン・サドゥアク水上マーケットを事例としてー  |                         |
| 研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)  |                         |
| <p>本研究は、タイの水上マーケットを対象に、地域社会で生活する人々、国の政策、行政、ビジネスがせめぎ合う「場」としての観光現象に注目し、観光開発を経験する地域社会の動態を明らかにすることを目的とする。水上マーケットは本来、バンコクと周辺都市との間に張り巡らされた運河を基盤に、水と深く関わる生活に根ざした人やモノの交流の場であった。その役割が低下した今、今度は観光地として再び各地で注目を集めている。水上マーケットに焦点を当てるのは、観光地化の過程を追うことで、バンコクの近代化に伴う経済活動全体の変容や、政府や行政の観光政策の特徴、国家の表象の変遷をも逆照射できると考えるからである。一方で、地域社会の復興やコミュニティ再編を目的にもたらされた観光開発を、地域住民がその日常生活に根ざした経験に基づいて、どのように取り込み、方向付けていくのかを考えてみたいからである。</p> <p>近年の観光をめぐる議論を俯瞰すれば、観光のインパクトと地域社会という枠組みの下で、観光現象を文化変容の一例として論じるものや、観光に内在する力関係の不均衡を契機とした、ホスト社会のアイデンティティの構築過程を論じるものなどに大別できる。地域を重視する傾向は見られるが、実際、地元への経済効果を計算することと同義になっていたり、観光実践の事例の詳述に留まり、地域の生業、社会関係、価値観の変容などとの関連がみえてこない。タイ人研究者による研究も、水上マーケットを無批判にタイの「文化」や「伝統」と位置づけ、単にデータの収集に終止していたり、観光が新たに引き起こす負の影響を分析する視点が欠けていたりする。</p> <p>現在執筆中の博士予備論文では、タイにおける水上マーケットの資源化の歴史的な過程と、現在の水上マーケットの分布やその背景を明らかにすることを目的としている。そのために、文化・観光政策、運河の所有や管理に関する法令や文書等を読み込み、その変遷をバンコクの近代化の過程と関連付けながら明らかにする。それにより(1)水上マーケットを資源とする見方が広く共有されていく中で、近年、再整備や建設が活発化していること(2)その結果として国内観光地としても重要になっていること(3)その一方で、地域市場としての経済・社会的側面も併存していること、等の点を論じる。</p> <p>以上のように、主に文献資料に基づいて水上マーケットの発展過程と全体的な分布状況を博士予備論文で理解した上で、本研究では、観光を取り込みつつ持続する、個々人や地域社会の生活実践があることを、フィールド調査によって明らかにする。特に、ダムヌン・サドゥアク水上マーケットに焦点を当てるのは、他所に先立ち1970年代初頭から水上マーケットの観光化を進め、長い時間軸の中で地域との関わりを考察できるからである。本研究によって水上マーケットに関わる地域の人々の生活、商業活動の実践、政府や旅行者、観光客等との交渉過程を追うことで、「所与の開発」に対する人々の日常生活の再編のあり方を多面的に描き出すことを目指す。</p> |                         |

# 成果報告書

記入日 2013 年 4 月 15 日

|  |             |                    |
|--|-------------|--------------------|
| 氏名 佐治 史  | 留学先国名<br>タイ | 所属機関<br>チュラロンコーン大学 |
| 研究テーマ：タイ都市近郊における観光化と地域社会の変容<br>ータイ ダムヌン・サドゥアク水上マーケットを事例としてー  |             |                    |
| 留学期間：2010 年 9 月～2012 年 9 月   |             |                    |
| <p>私は、2010年9月から2012年9月までの2年間、上記の研究テーマに関して文化人類学的な手法で長期現地調査を実施するため、タイで留学・研究生活を送ってきました。以下、留学と研究に分けて成果報告をさせていただきます。</p> <p><b>〔Ⅰ〕留学生活〔期間：2010年10月～2011年1月〕</b></p> <p>今回の留学にあたり、受け入れ所属機関となったのは国立チュラロンコーン大学政治学科（人類学専攻）でした。受け入れ教員となってくださった先生からは、タイ語関連資料の提供、人類学関係の研究者、政府関係者を紹介いただくなど、研究を進める上での便宜をはかっていただきました。</p> <p>また、この期間は現地調査に必須のタイ語を身につける期間となりました。幸い、国立チュラロンコーン大学には外国人向けのタイ語習得コースが開講されており、タイ文字、文法、会話まで短期間で集中的に学ぶことができる環境でした。語学を学ぶ仲間の中には、タイ研究者、他大学の院生も数多く含まれ、タイ語習得のみならず研究者の仲間を得る機会にもなりました。</p> <p>くわえて、この時期は、首都のバンコクにアパートを借りて滞在しており、各大学の図書館、バンコクで開催される古本市、古本屋をまわり、現地語の文献収集につとめました。特に、水上マーケットの過去の様子を知る上で重要な比較的古いガイドブック（80年ほど前のもの）、古写真、政府観光局発行の旅行雑誌（1960年～現在）等はこの時期に集中して集めました。</p> <p>そして、タイ語で簡単な会話ができるようになった2011年1月に、バンコクから南西80キロ、ラーチャブリー県ダムヌン・サドゥアク郡のダムヌン・サドゥアク水上マーケットと周辺農村を訪れ、調査地での受け入れ世帯の交渉にあたりました。</p> <p><b>〔Ⅱ〕現地調査〔期間：2011年2月～2012年9月〕</b></p> <p><b>■問題の所在と研究目的</b></p> <p>水上マーケット（Floating Market）は、本来、バンコクと周辺都市との間に張り巡らされた運河を基盤に、水と深くかかわる生活に根ざした人、モノの交流の場でした。しかし、陸上交通の発達など諸要因によりその役割を低下させた今、観光の場として注目されています。大きな特徴は、この「水辺の市場」が運河という国有地内、かつ地域住民の共同利用が法的に認められた場に形成されていることです。そこで、<b>本研究は、地域の生産・流通の担い手が生業を通して、どのように水辺という共同資源を利用・所有しているのかを明らかにすることを研究目的とします。</b>（現地調査をふまえ申請時と若干の変更有。）</p> |             |                    |

## ■調査対象・方法

私は、タイ中部ラーチャブリー県ダムヌン・サドゥアク郡にあるダムヌン・サドゥアク水上マーケットを調査対象としました。調査期間は、2011年2月から2012年9月で、市場を稼ぎの場とする青果物の中間商人、生産者商人、土産物売り、運河ボート観光舟のオーナー、観光舟の漕ぎ手、のべ200名を対象にしました。調査開始当初から、運河沿いの地域住民世帯に同居し、市場の土産物売りの店で働きながら、客とのやりとりや商売の技術、売り手どうしの関係に関する参与観察・聞き取りを行いました。また、青果物の中間商人の販売や農村への仕入れに同行し、流通過程の把握、生産者の栽培技術に関する調査も実施したほか、売り上げ帳簿、家計簿等の分析も行いました。

## ■調査内容と長期フィールドワークによる成果

人びとが水辺の市場に集まるのは、ツーリストや市場の商人を相手にした商売が成立するという前提があります。一見すると、オープン・アクセスな運河で、人びとは個人の利益追求と市場の秩序維持、管理をどのように成り立たせているのでしょうか。本研究では、水辺を①運河内（水が流れる部分）と、②運河の両脇の部分（水面と陸上が接する部分）、③陸上部分の3つの空間構造に分けて分析します。

### （1）市場内の環境認知と販売テリトリーの形成

流通・販売の担い手は、水面上の①、②に「販売テリトリー」を形成し、他者の商行為をある程度排除・制限しています。場所の選択には、集客規模、収益の多寡、日照、水流など自然環境を含む諸条件をふまえていることがわかりました。ここでは、テリトリーの生成、消滅、継承の動態を明らかにしました。

### （2）水辺の市場での商実践にみる知識や技術と流通ネットワーク

市場には、青果物や土産物を問わず同種の商品を扱う商人が密集しています。まぎれもなく、他の店は商売敵であり、多くの客を獲得するために、各商人は、商品の品質、品揃え、客との交渉に際し、さまざまな知識や技術を動員していることがわかりました。また、青果物を販売する中間商人の場合、年間を通し毎日販売を行うために、数十人の生産者から青果物を仕入れ分けていることがわかりました。

### （3）市場でどのような共同性が形成されるのか

市場内で、商人どうしは競合関係にあるだけでなく、欠品時の商品の融通、客の譲り合いなど協力関係もみられました。また、市場内には複数の頼母子講が存在しています。それは、商人がグループを形成し、定められた日に一定の掛け金を出し合い、その総額をメンバー内の希望者一人が落札するものです。頼母子講の形成過程、活動実態、構成員の動態を明らかにし、講への参加と商売での利益追求の関連を考察しました。

### （4）水辺の市場で得られる富（収益）が誰とどのように分配されるのか

商実践で生み出された富は、独り占めされるわけではありません。家族で消費されたり、商売の協力者に分け与えられたり、喜捨のために使われたりしています。ここでは、富がどのような手続きを経て、誰の手に渡っていくのか、分け与えることと富の蓄積との関係を明らかにしました。

以上、2年間のタイへの留学・調査を通して明らかになった成果の一部をご報告させていただきました。今後執筆する博士論文の中で、研究目的に対する結論を出していく所存です。

最後になりましたが、今回長期にわたる現地調査が実施できたのも、松下幸之助記念財団から助成をいただいたおかげです。本当にありがとうございます。心より感謝申し上げます。

右図：水辺の市場の商人たち（出所：筆者撮影）

